

空



2017・12

SORA 76号

大野城 森 田 明 成

決勝は女兒が制しぬ草相撲

田や畑の消えゆく町や白木槿

触れ合つて裾の揃はぬ秋すだれ

酔ふほどは飲めなくなりぬ秋の風

金色に仏具をみかく菊日和

太宰府 山 本 則 男

大地より湧き出るとく盆の唄

ちちははの山河あまねき盆踊

ひと風呂を浴びて踊に加はりぬ

一村の形に猪垣つづきをり

芋の露大地を穿つ力あり

大阪 井 上 和 子

きのふけふ眠れぬ朝を野萱草

靴底に砂のざらつく揚花火

草丈を鎌もて払ふ盆の道

逝く友に唄の流るる星月夜

喪の家の裸電球虫しぐれ

兵庫 林 徹 也

ゴルゴタへ続く西坂蟬時雨

空蟬と同じ高さに殉教碑

ご聖体受くる十葉匂ふ手に

十葉のかすかに匂ふ仕舞風呂

退院の扉開けば虫時雨

太宰府 西住三恵子

吊橋の思はぬ長さ霧はるる

蓮は実に掃き尽されし戒壇院

手向けある赤のまんまや道祖神

自画像の頑なな顔式部の実

秋深し玄昉墓に水そそぎ

東京 今井康子

九十の母と見晴らす花野かな

皿洗ふ手のたくましきキャンプ村

かなかなの声さみしいのともちがふ

ほの温し新米に手を埋めれば

まだ名前なき子の爪や鳳仙花

熊本 松田明子

鈴虫の声家ぢゆうを席卷す

鈴虫の声虫籠にをさまらず

ちりばめしごとき虫の音古戦場

ゆつたりと水を捌きし下り籾

百八ツに余る数珠玉摘みにけり

粕屋 吉田 菫

黒糖の色まさりたる更衣

明日植うる田にしばらくは星のゐる

もののふのごとき貌してやごの殻

朝日さす金覆輪の蛇の目草

秋初めうすく透きたる護符の文字

直方 曾根 富久 恵

明易や針目を荒く繕ひし

炎昼や土器のくつつく資料室

窓ガラス震はせ大花火極彩

くろぐるとブレーキ痕も灼けてみし

ほろ酔ひの四五人月を愛でてをり

東京 遠山のり子

蛇行する川波まぶし葛の花

咲き揃ひ仏の肩に女郎花

クラス会コスモスの風に迎へらる

柿たわわ茅葺き屋根の黒ずみて

新涼や百畳敷の大広間

北九州 横田 敬子

語部も代替はりして広島忌

冷房を知らざる父の忌日かな

算盤の教室は寺夏休み

積み上げて青き匂ひの今年藁

供花焚きし灰の残れる残暑かな

兵庫 青木 朋子

京都市行き電車に薄羽蜉蝣も

先導は鉄杖竹杖銚進む

大船銚五十余人に引かれけり

屏風絵は深山幽谷夏座敷

西瓜並ぶ「叩かないで」の札を付け

京都 天谷翔子

わたくしのためありぬべし夕花野
ここは我が花野ぞ汝の名を告げよ
箱の蓋取れば花野の展がれる
別れたる花野にひとり戻り来し
行先未定花野寝寝台車

福岡 矢野百合子

秋立てりカールブッセの雲湧きて
路地曲がるたび新しき秋の風
敗戦日朝から烏鳴き交はず
ひぐらしやそろそろ腰を上げようか
身を庇ふごとく降り敷く花槐

東京 山田正子

烏瓜電流ながれ実を灯す
喪の家の水蜜桃の匂ひかな
芋の葉の上で整ふしづくかな
ぼうぼうと焼かれつぷりよき秋刀魚かな
芒原もどれぬほどに捕らはれし

兵庫 岩井京子

摘み来しと峽の茗荷の子を賜る
瓢形のかぼちや深吉野育ちかな
すすきの穂月に供ふに間に合ひぬ
秋雨に摘むラベンダーしばし手に
身を反らす胸に秋天高くあり

北海道 押田裕見子

手捻りの皿に入る罅夏旺ん

この先も一喜一憂桐の花

手をかくるほどに色濃き茄子の花

駒の寄る柵の内外秋桜

台風裡漢は外へ飛び出しぬ

福岡 三井所美智子

花を噴く百日紅を畏れけり

母の爪切りて晩夏の別れかな

バスを待つ一人の時間鱗雲

仰向けに鯛乾ぶ下り坂

馳走ぜめ唐津くんちの栗おこは

神奈川 窪みち子

木道に昨夜の湿りや沢桔梗

遠くより呼ばるるやうな大花野

溝萩や夫の背つひに見失ふ

かすかなる風を捉へて蕙の花

草の花ヤク来てどさと坐りけり

中国青海高原

福岡 亀井紀子

仏間には若き写真や憂国忌

子どもらの声の拡がる寒稽古

繰り言も生きる証や古日記

愛犬と背を丸めて冬の月

大声も小声もありて寒の行

空集抄
柴田佐知子抽出

桃をむく桃のことだけ考へて

高倉和子

雷鳥の胸に残れる雪のいろ

岸洋子

鷺翔つや青田の照りを羽裏にし

深川淑枝

鍬掛けて両の手空きぬ秋夕焼

原友子

遠雷の近づく空を這ふやうに

曾根富久恵

山裾の日暮れは早し蕎麦の花

戸栗末廣

さくらんぼ一人叱れば二人泣く

角野良生

恐竜はわたしの方か蜥蜴逃ぐ

青木朋子

猪垣の中にしづまる盆の村

山本則男

臥す吾に夜のすぐ来る白障子

宮井知英

煮炊きせぬ大鍋ばかり鳥渡る

永淵恵子



浦の月蠢いてゐる鹿角堂

サングラス越しに見られてゐるやうな

菊人形科白空んじをるらしき

喪服脱ぎ暑きこの世へ戻りけり

鷹渡る頭上川なす一千羽

叱られて強を選べり扇風機

草の花いつしか膝の衰へて

仏間まで運んでくれし大西瓜

誰も来ぬ隣の墓も洗ひけり

露けしや道鏡の碑は草の丈

稔田を巡れば母に逢へさうな

泣き入つて声を失ふ泣き相撲

白もまた燃ゆる色なり曼珠沙華

小林 朱夏

秋 千晴

中田みなみ

石橋幾代

千波 悠

栗原京子

井上 和子

河原 敬子

天谷 翔子

田岡 千章

矢野百合子

吉 田 菫

大西 乃子

蟬時雨足だけ見ゆる乳母車

踊唄の方へ百歳寝返りぬ

稲妻に見つかる前に寝てしまふ

冬瓜の悪しからずてふ据りやう

浜ならずブルドーザーや海開き

余生てふ放課後が好き金魚玉

秋の蜂翅収まらぬ怒りあり

帰省子に育児書二冊買うて待つ

もて余す早起きとなり虫の声

鍼力屋の硝子戸越しの秋の暮

いつせいに帰り仕度や初盆会

草むしる小鳥の墓はこのあたり

骨張りし母の背に打つ天花粉

山内 碧

林 徹也

仲里 奈央

田代 民子

佐藤 和弘

西住 三恵子

児玉 充代

岩下 きぬ代

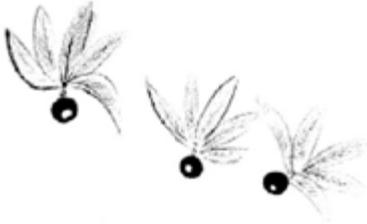
森田 明成

松田 明子

古賀 真理

山田 正子

小島 翠波



鳥渡る森の窪みに窯の跡

銀漢や世界に一つ我が指紋

青嵐谷に無人の駅舎あり

バス待つやどこぞの家の秋風鈴

仕舞際庭師差し出す秋茗荷

螢を貰ひし夜の落ち着かず

かなぶんの腹くすぐるや網戸ごし

西瓜食む旨きところは種多し

ロボットも盆休みみらし首折りて

貸し農園思ひ思ひの夏野菜

飴細工の金魚が光る夏まつり

着ぶくれて犬と留守番してゐる子

盆踊り炭坑節で入りにけり

えとう樹里

織田高暢

田坂能雄

早田保子

村上二三

田代貞香

本多トミ

倉智万数雄

岩井京子

田中素直

石井みゆき

あさなが捷

三輪敏夫

空作品評

柴田佐知子

桃をむく桃のことだけ考へて

高倉 和子

元の方は青みを帯び先の方はほんのりと紅らんだ珠のような桃の実。食べると水分は滴るばかりだ。へ夕月や脈うつ桃をてのひらに 伊藤通明へもぎたての白桃全面にて息す 細見綾子…：桃のみずみずしい美しさは、あらゆる方向から詠まれている。和子さんの句も自分の様子を詠んでいるが、ここに立ち上がってくるのは桃の美しさである。他の果物に入れ替えてみるとこの句の佳さが鮮明になってくる。例えば蜜柑では成り立たない作品である。作者の技倆と感性が光る。

鎌掛けて両の手空きぬ秋夕焼

原 友子

農業に従事される日々を切り取った友子さんの「私の歳時記」は、自然や作者の息遣いまで感じさせてくれる随筆で、毎号楽しみにしている。文章もそうだが、俳句も確かな実感がある。

農作業を終えかえってきて納屋の壁に鎌を掛ける。日が傾き辺りはもう夕焼に染められている。へ両の手空きぬがよい。ちよつと庭の手入れをするだけではこのような措辞は浮かばない。田畑で働いた時間が籠められた優れた表現である。

臥す吾に夜のすぐ来る白障子

宮井 知英

俳句を力として闘病生活を送られている知英さんの弛まぬ努力には頭が下がる。私も一ヶ月ほど安静ということで入院生活を送ったことがあるが、高熱の中ただただ眠いばかりで食事で起こされるのも煩わしく感じたことを思い出す。知英さんは静かに過ごされているのであろう。へ夜のすぐ来る…：病臥される部屋で一日が明け、日暮れがやってくる。障子の白さが心にしみる。へ以下略

空集

柴田佐知子選



花火果てしばらく夜空整はず

福岡 高倉和子

小石より乾きてきたる地藏盆

雨上りの草の匂ひや夜の秋

道草の丘の初恋小鳥来る

桃をむく桃のことだけ考へて

思ひ出すやうに鳴りたる鳴子かな

新米をこぼるるほどに供へけり

夕暮の寺の匂ひや吾亦紅

福岡 岸 洋子

かなかなや神に縁切り縁結び

鮎梁を外れたる水のほとばしる

青空の少し見えたる土用波

歩巾広がる秋風を耳に目に

覗くほど暗くなりたる蝉の穴

雷鳥の胸に残れる雪のいろ

鷺翔つや青田の照りを羽裏にし

錆罨にばねの威残る秋暑かな

新藁を干す香の甘き日暮かな

水口の堰板乾く雁渡し

湾深くまで荒れてをり零余子飯

納屋に干す野良着斜めの月明かり

指笛に山河広がる九月かな

鍬掛けて両の手空きぬ秋夕焼

草ぐさの力抜かざる白露かな

草の絮考へながら宙を行く

千葉 原 友子

北九州 深川淑枝